

# 遠隔診療の プラットフォームサービス

小川智也

Tomonari Ogawa

MRT 株式会社

## KEYWORDS

- 遠隔診療
- デバイス
- 遠隔モニタリング
- スマートフォン
- アプリケーション

スマートフォンを中心とした通信機器の急速な技術革新は、遠隔診療サービスの概念を大きく変えた。現在提供されている遠隔診療プラットフォームは、画面を介した診療行為だけでなく、診療事前確認(予約)、会計、投薬、配送サポートまでをカバーするなど、医療機関のさまざまな負担を大幅に軽減する仕組みが完成されている。さらに、より対面診療に近づけるための Internet of Medical Things (IoMT) 機能を実装したデバイス連携や補完機能の充実化も進み、医療者と患者双方が安心して診療が実施できる仕組み作りも活発化している。今後、医療経済的観点からの検討だけでなく、セキュリティ担保の仕組み作りに対する規制強化など、安全な医療を提供するうえで必要となる体制の強化が望まれる。

## はじめに

スマートフォンを中心とした通信機器の急速な技術革新は、私たちの日常生活だけでなく産業構造をも大きく変えようとしている。医療分野への活用も同様で、特にアプリケーションを活用した遠隔診療サービスは急速に普及が始まり、今後この傾向はさらに強まることは必須である。

近年、移動通信手段としてのスマートフォン普及率は著しく上昇しており、国内での全携帯電話端末に占めるスマートフォン保有率は平成 22 年の 9.7% から平成 26 年の 64.2% へと急速に上昇した<sup>1)</sup>。また、“電話”としての通信サービスの概念を大きく変え、アプリケーションの活用でマルチデバイスへと変化を遂げている。さらに 2009 年総務省公表の資料<sup>2)</sup>によると、日本の ICT 基盤は世界最高水準であるばかりでなく、移動通信速度も 30 年で約 1 万倍も向上した。

マルチデバイスとしてのスマートフォン、世界最高水準の ICT 基盤の活用は、Internet of Medical Things (IoMT)

として医療分野への活用にも非常に親和性が高い。

このような環境のなか、未来を見据えた取り組みとして、平成 27 年 6 月「経済財政運営と改革の基本方針 2015」で IT を活用した「遠隔医療の推進」の内容が盛り込まれ、さらに平成 27 年 8 月の厚生労働省通達<sup>3)</sup>を受け、モバイル端末や通信技術を活用した遠隔診療の議論が一気に活発化した。

現在、すでに複数企業が遠隔診療プラットフォームサービス事業に参入しており、MRT 株式会社「ポケットドクター」、株式会社メドレー「CLINICS」、株式会社情報医療「curon」などが代表的なサービスとして挙げられる。

## 1 遠隔診療とモバイル端末

遠隔診療プラットフォームは、アプリケーションを活かすことで、導入コストを大幅に抑え新しい形態の遠隔診療を提供する。

サービスを利用するデバイスは、医師側・患者側とも